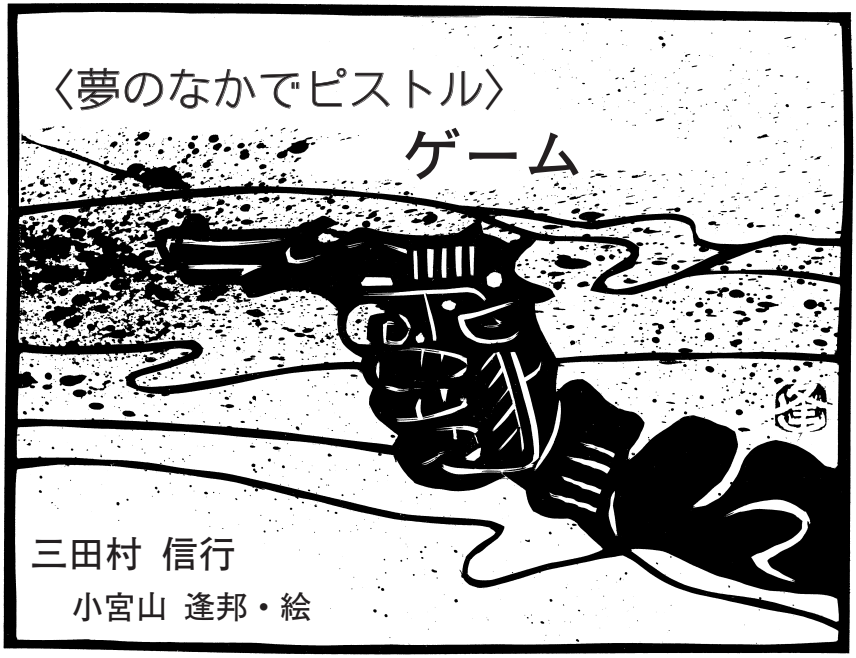

第一ステージ

「これはゲームです」

と、男はいった。

若い男だった。大学生だろうか。あごの下にうっすらとひげをはやしている。

そこは塾の教室のような部屋だった。四方は白い壁で、天井からさがっている蛍光灯が、青白い光を注いでいる。正面には移動式の黒板。一人掛けの机つきのいすが三〇ばかり。実際、塾の教室なのかもしれない。それにしては、窓もドアもないのがおかしいといえばおかしい。

いすは、ほとんどうまっていた。五、六年生から中学一、二年生ぐらいまでの子どもたちで、男の子も女の子もいる。

「これはゲームです」

男は、もう一度くりかえした。

「きみたちの机の上にあるものがおいてある。まず、それをたしかめてみよう」

男のことばにしたがって、みんないっせいに自分の机を見た。部屋じゅうにざわめきが広がった。

「それがなんだかは、もちろんわかるね」

男は、にやりと笑った。机の上にのっていたのは、一丁のピストルだった。

本物だろうか。こわごわさわってみた。鋼鉄の冷たい感